初級後半日本語コースでの多読授業
――2018年秋学期から2021年春学期までの6学期間の実践――

大西涼子・中村透子・渡会尚子・福富七重・
竹田和代・土居美有紀・駒田朋子

要　旨

本稿は初級後半日本語コースにおいて2018年から継続して行っている多読学習活動について報告する。多読は楽しんで多く読む活動であり、各学習者が読みたいものを選んで読む。1学期間に8回程度行い、各回の活動で学習者は本を読み、読んだ本について読書記録をつけた。教材は当初は主に市販の多読用図書を使用し、児童書や絵本を加え種類を増やした。2学期間実施した反省を踏まえ、2019年には回が進むにつれ教材が難しいものになるように調整したり、紹介文を書くなどの活動を取り入れたりした。2020年、2021年のオンライン授業ではLMSを利用し主としてオンデマンド（非同期型）授業で行った。その際の教材はweb上に公開されている無料の多読用読み物とその音声の他、詩や動画も使用した。読書記録はLMSを利用して学習者同士が感想を述べ合える形にした。コース内で多読とは別に発音練習を行っていたこともあり、学期末に多読読み物の朗読発表会も行った。

キーワード：初級後半日本語コース、多読、読書記録、朗読、オンライン授業

1. はじめに

南山大学外国人留学生別科の初級後半日本語コースであるJapanese IIの授業に多読が取り入れられ、主教材とは別の多読用の教材を使って活動が行われている。2018年から継続して行われており、2020年、2021年のオンライン授業においても実施された。オンライン授業においては点数が付与される学習活動となり、重要性も増した。このように継続して行われているということは各学期の授業担当者がその効果を認めているからだと考えられ、今後も実施されることが予想される。本稿は今後の教材の取捨選択や実施方法の改善につなげることを目的とし、多読を取り入れたきっかけ、使用教材（読み物）、活動実施方法、現在の方法に至った経緯などを報告する。

なお、このコースは2021年秋学期から科目名が「Intensive Japanese II」となり、1コマ100分となった。2021年秋学期に多読は引き続いて行われているが、本稿では2021年春学期までの「Japanese II」での授業実践を報告する。

2. 先行研究

第二言語学習における多読については、効果が確認され、授業での実施例も報告されている。本章はそれらについて述べる。

2.1. 多読とは

第二言語の読みの授業では、精読（intensive reading）が行われるのが一般的であろう。精読は主として教科書の読解テキストを、語句や統語に注意して正確に内容を理解する活動である。これと違った読みの学習として、多読（extensive reading）がある。多読は「大量に読み」、「読むのを楽しむ」（デイ＆バンフォード，2006，p. 5）活動であり、学習者一人一人がそれぞれ読みたいものを選んで読む。多読向けに書かれた読み物（以下、本稿では「多読用図書」「多読本」とする）を使用する場合が多い。読み方として、粟野ほか（2012）は「1. やさしいレベルから読む」「2. 辞書を引かないで読む」「3. わからないところは飛ばして読む」「4. 進まなくなったら、他の本を読む」という4つのルールを挙げている（pp. 17–18）。

2.2. 多読の効果

多読の効果として期待されることは、第1点目に、読みのスキルの向上である。日本語母語話者の英語学習について、門田・野呂（2001）は「英語を日本人がすらすら読めるようになるためには、速く、正確な自動的単語認知力をつけなければならない。それにはできる限り多くの活字に触れることが必要で、多読は最良の方法である。」と述べている（p. 343）。一方、日本語非母語話者の日本語学習について、熊田・鈴木（2013）は、中級前半レベルの読解クラスで15週間にわたって多読を実施し、学期開始時と終了時に学習者の注視（文章中のある箇所に33.3ミリ秒以上視線が留まること）と文章の内容再生はどうであるかを実験し、その結果を報告している。その結果を見ると、学期終了時には注視回数が増え、また長い注視が増えていたが、「注視ができるということは注視すべきところがわかる」ということであり、「内容理解をする上で重要となる注視ポイントを体得したことを意味する」としている（p. 45）。内容自由再生実験の結果からは「既有知識の枠組みを利用できない出来事や、物語の背景を流れる因果関係などについても読みとる力がついてきたことが窺われる」としている（p. 43）。

第2点目は読むことへの積極的な態度が養われることである。デイ＆バンフォード（2006）は、多読は学習者が「彼らの言語能力に合った教材を読み、読みたいものを選ぶことができ興味のない話題について読むことを強制されない」活動であり、「第二言語のリーディングに対する積極的な態度を作る可能性が高い」としている（p. 35）が、日本語

多読において佐々木（2017）がこの裏付けとなるだろう。佐々木（2017）は、1回90分、週2回、15週間の多読授業を行ってその受講生を対象に質問紙を用いて調査し、受講生34人分の自由記述回答について「外国語読解不安の低減・読書継続の意思・読書の重要認識が述べられていた」と報告している。

第3点目として、学習者の自己肯定感につながることが期待される。熊田･鈴木（2019）は、週1回（90分）15週間の多読授業を行うにあたって、クラスのコンセプトを「学習者が持つ日本語の文章に対する苦手意識やストレスをできるだけ排除し、学習者が不安なく楽しみながら、自己肯定感を持って自律的に読むことができるようになる」（p. 164）と定め、授業では（1）1人1人が異なる本を読むことによって自分より有能な他者との比較（例えば「漢字圏の学生は上手に読める」）をなくす、（2）学習者が「有能さ」を感じるために自らの力で1冊を読み切り、「自律性」を感じるために読み方に関するすべての決定権を学習者が有する（例えば、学習者自身が読みたいと思うものを自由なスタイルで読む）、（3）「読書シート」や「本の紹介」の活動によって教師や他の学習者との「関係性」を保つ、といったことを行ったと報告している（pp. 164–165）。そして、この15週間の学期末の「振り返りアンケート」を分析して「多読が日本語の文章を読むことに対するストレスや不安感を和らげ、読みに対する肯定感を上げ」たと述べている（p. 165）。

2.3. 日本語授業における実践例

大学での日本語多読授業の実施について、片山（2015）、横山（2018）、池田（2018）、Hanabusa & Juhn（2018）、佐々木（2019）、大越ほか（2020）などの報告がある。いずれも、1学期間（15週間）の授業についての報告である。その内容をまとめると表1の通りとなる。表1から分かるように、どの報告においても、授業時間の中で、学習者各自が本を読んだ後、読書記録をつける、読んだ本について話すなどの活動が行われている。学期末に学習成果物を作成・発表する活動を行ったとする報告もある。多読授業を行う場所は、教室や大学図書館が利用されている。

2020年はコロナ感染症が広がり、その影響で多くの日本語授業がオンラインによる遠隔授業となったり、履修者が少なくなったりした。その状況下での多読授業について、横山（2021）、作田（2021）等が報告している。横山（2021）は、オンラインによるライブ（同期型）授業で多読を実施し、オンライン化前後を比較して「オンライン化後はweb上で閲覧することができるデジタル素材や動画、アニメ、音楽など『読む・観る・聴く』ものが多くを占めるようになった」と報告している。作田（2021）はオンラインで実施した履修者1名の多読授業について、授業内で読書、ブックトーク、画面共有をしての音読などを行ったと報告している。

本節で挙げた報告はいずれも多読に特化した授業科目についてのものであるが、本稿で

表1　日本語多読授業報告の内容

	片山（2015）	横山（2018）	池田（2018）
日本語レベル	初・中級	中級	中級
時間・実施回数	前半30～40分の読み、後半は活動。週1回×15週	90分×週1回×15週	90分×週1回×15週
個別に読む以外の活動	本の紹介、読み聞かせなど。	レポート作成、話し合い、発表。	読書記録、話し合い。学期末に多読本創作。
活動場所	教室	教室および大学図書館	（言及なし）

	Hanabusa & Juhn（2018）	佐々木（2019）	大越ほか（2020）
日本語レベル	1～4,5年生各レベル	中上級	初級、初中級
時間・実施回数	50または100分×15回	90分×週2回×15週	90分×週2回×15週
個別に読む以外の活動	読書記録、話し合いなど。学期後半にプロジェクト（創作、ブックトークなど）。	読書記録、ブックトークなど。	読み聞かせ、ブックトークなど。
活動場所	大学図書館内の教室	大学図書館内の研修室	多読専用教室

報告する多読活動はそれらと異なり総合日本語コースの授業の一環として実施したものである。以下、3章でコースにおける多読の位置づけを述べた後、4，5，6章で各学期に中心となって多読活動を行った教員がその実践を報告し、7章でまとめを述べる。

3. Japanese IIでの多読の位置づけ

南山大学外国人留学生別科Japanese IIのコースでの多読活動は2018年秋学期に始まった。本章では、Japanese IIの概要とコースでの多読の位置づけについてまとめる。なお、各年9月から12月までが秋学期、1月から5月までが春学期である。

3.1. コース概要

Japanese IIのコースは、受身形、使役形までを含む基本文法と320字の漢字の習得を目標とする初級後半コースで、主教材に坂野ほか（2011）『初級日本語　げんきII』（以下、『げんきII』）を使用し[1] 13課から23課までをカバーする。1クラス15名以下のセクションに分かれ、1コマ90分、週8コマ、14週間勉強する。週8コマのうち、5コマは文法練習を含むコミュニケーション活動を、3コマは読み書き活動を中心に行っている。評価は授業参加が15％、宿題15％、小テスト20％、試験50％で評価する。

3.2. 2018年秋学期多読活動の始まり

Japanese IIのコースにおける多読活動は2018年秋学期から始まる。具体的な活動については第4章で詳しく述べるが、週3コマの読み書き活動の時間に入れたのがはじまりである。学期当初、多読を予定には入れていなかったが、コース中盤第7週目から開始し、週1回合計6回、授業開始直後20分ほど取り入れることになった。取り入れた経緯だが、1つは、この学期から別科全体でのコースの見直しに伴い、コースのカバー範囲が『げんきII』に絞られ時間的に少し余裕ができたこと（それ以前は、『げんきII』に加え『中級の日本語』1課と2課をカバー）である。それに加え、『げんきII』既習者で、1つ上のレベルを希望したものの入れなかった学習者が例年より特に多かったことから、学習意欲の維持と中級レベルに入るための読解力の育成を目指し、自分のペースで楽しみながら読解力を伸ばすことができる多読を取り入れることにした。多読活動については、宿題はなく成績評価もしなかった。学習者の受けとめについては、2018年秋学期の授業評価の自由記述欄に、多読について「教科書以外の読み物を読むことができる」と好意的な評価が見られた。この学期以降、2019年春学期、2019年秋学期へと多読活動がJapanese IIのコースの中の活動の一環として改善を重ね定着していく。

3.3. 2020年春学期後半から2021年春学期まで

2020年春学期、対面授業でスタートしたコースは、コロナ感染状況が悪化したため学期中盤の7週目で急遽対面授業を取りやめ、8週目からLMS（Canvas）を使用したオンライン授業に変更することになった。したがって2020年春学期後半、2020年秋学期、2021年春学期については、オンライン授業の中での多読活動となる。2020年春学期オンライン授業では、学期末の口頭試験以外はオンラインミーティングツール（Zoom）を使用した同期型授業は行わず、すべてLMS（Canvas）を介してのオンデマンドによる課題となった。多読活動については、オンライン授業になってからも継続して全6回行った。対面授業と同じような活動が殆どできない中、自分のペースで取り組める学習者主体のオンデマンド型多読活動はオンライン授業でも安定して続けることができた。多読活動の成績評価については、課題（全体の50％）の中に入れ、読書後に一言コメント等を書いた読書記録を提出すれば点数を与えた。

続く2020年秋学期、2021年春学期は日本語コースのすべての授業がオンラインで行われ、週5コマのZoom授業と週3コマのオンデマンド授業となった[2)]。多読は、主としてオンデマンド授業で行った。この学期の活動については、第5章、第6章で多聴・多観を含むオンデマンド型多読活動を詳しく報告する。

4. Japanese IIでの多読学習活動の始まりと広がり（2018年秋学期から2020年春学期）

本章は多読が始まった2018年秋学期から2020年春学期の多読活動について述べる。

4.1. 2018年秋学期

3章でも述べたように、当時プレースメントテストにおいて希望するコースにプレースされなかった学習者、既に主教材である教科書『げんきII』を自国で学習済みの学習者が在籍することによる学習意欲の低下が懸念されていた。また、読み書きクラスでは精読中心の授業を実施していたため、学習者が日本語で読書を楽しむ機会も提供してみたいと考えていた。日本語での読書経験を積んでおけば、帰国後も日本語学習を続けられるのではないかという期待もあった。そこで、担当教員たちで話し合い、学習者が自ら読むものを選択でき、教科書を使用した精読中心の授業とは異なる自由度の高い多読学習活動を授業に取り入れてみることにした。

学期後半から週に1回のペースで授業の20分程度を利用し、多読学習活動を6回実施した。「多読」を始める前に英語で書かれた説明のプリントを用意し、1）面白い本を読む、2）やさしい本を読む、3）難しい単語は飛ばすといった多読を行う上でのルールを確認し、開始した。また、学習活動を記録として残すため、本のタイトル、評価、短いコメントが記入できる読書カードを作成した。それを毎回多読学習活動が始まる前に学習者に渡し、学習活動中にそれぞれが記入するよう求め、学習活動終了後に教員が回収して保管した。

多読の対象となる教材（以下、「教材」とする）として、主に市販の多読用図書であるNPO多言語多読（2006）『レベル別日本語多読ライブラリー　にほんごよむよむ文庫』のレベル1～3を使用した。そのほか、教員がそれぞれ絵本や児童書を担当セクションの教室に持ち込んだ。休み時間に他セクションの教室にある本を見て選んでもよいとしたが、そうする学習者はほとんどいなかった。また、読みたい小説やマンガなどを学習者が持ち込んでもよいこととしたが、多くの学習者は用意されたものを読んでいた。

集中して読む様子が見られ、多読の時間が終わるのを残念がってもいたので、試験的に導入した多読学習活動であったが、学習者によい効果があるのではないかと感じた。しかし、課題として実施回数、本の持ち込みの可否、教材の充実が挙げられる。その日の授業の進み具合によって、多読の時間が短くなったり、実施できなかったりしたこともあり、もう少し学期の早い時期から始めて回数を重ねることでより効果が上がるのではないかと考えた。また、明らかに実力以上の本を持ち込み、読み進めることが困難な学習者が見受けられたことから、今後、教材は教員が用意したほうがよいであろうと判断した。

4.2. 2019年春学期

2019年春学期には、前学期の経験を踏まえ、開始時期を早め、多読学習活動を8回実施した。前学期と同様、多読のルールを確認したうえで、読書カードを使用し、多読を開始した。また、学習者がマンガなどの本を持ち込むことは不可とした。そして、本を選ぶ楽しさを意識し、学習者が子供の頃読んで内容を知っているかもしれない絵本を選んで加えてみるなどして、用意する本の量を増やした。前学期はセクションによって教材が異なっていたが、この学期は教材となる本を教室の外に並べ、どのセクションの学習者も平等に全ての本を休み時間に手に取って選べるように変更した。本章執筆者（大西）が教材となる本を準備していたこともあり、担当セクションでは学習者の反応を知るため、授業時間に余裕がある場合は図書館で借りてきた絵本の読み聞かせも何度か行った。その際、学習者は興味を持って集中して聞いているように感じた。また、読み聞かせに使用した絵本を多読の時間に読んだり、その絵本を他のセクションの学習者に勧めたりする学習者もいた。

前学期と比較すると、多読学習活動中に読んでいる本について学習者同士が会話する様子、読み終えた本を貸し借りする様子、休み時間に読みたい本を何冊か確保する様子が多く見受けられた。また、読書カードに記入中の学習者にどの本がよかったかなど積極的に声かけを行なった。

使用する教材に関して、学習者が好む本とはどのようなものなのかという模索は続いていた。難易度レベル1～2とされている教材がやはり読みやすいのではないかということで、「KCよむよむ」[3] などのウェブサイトを利用し、新たに教材を追加した。特に、『お化け』『お菊さん』は人気があり、多くの学習者に読まれていた。

やさしい本を読むという点を、説明の際に前学期より強調はしたが、用意する教材はやさしいものと難しいものが混在しており、やさしい教材から段階的に難しい教材へ移行する形で教材をコントロールすることは行わなかった。難しいものを選んでしまい時間内に読み終えられない学習者もいて、時間内で2、3冊読める程度のやさしさがよいのではないかと感じた。教員が段階的に教材のコントロールを行った方が読む本の量が増え効果的ではないかという疑問が残った。

4.3. 2019年秋学期

2019年秋学期も前学期と同様の形式で、多読学習活動を8回実施した。

変更した点もいくつかある。まず、前学期までの3つのルールに4）わからない時は違う本を読む、を加えた。また、なぜ多読をするかをわかりやすく示した方が学習者も一生懸命取り組むのではないかという意見が他の教員からあったことを受けて、ルールの説明だけでなく、たくさん読む理由、やさしい日本語を読む理由、教科書で学ぶこととの違いについても学習者に伝えた。その結果、多読に対する学習者の期待が高まり、早く始めた

いという声も上がった。そのほか、どのような本が学習者にとってよいのかをさらに詳しく知るため、読書カードに変更を加え、教材の「やさしさ」と「面白さ」について評価してもらうことにした。

この学期も教材の準備を担当し、前学期終了時の疑問であった、教材の難易度の段階的なコントロールが必要かどうか探るため、用意する本の難易度をレベル0～1、1～2、2～3と段階的にコントロールしてみることにし、回を追うにつれて難しいものになるようにした。学習者が読書カードに記入する本の冊数は全体的に増えたが、特に初期にはもっと難しいものを読みたいという学習者からの要望も増えた。それは、2018年秋学期と同様、本来の希望ではないJapanese IIへプレースされてしまった学習者が何名かいたからではないかと考える。

教材に関しては、物語以外に、浮世絵など美術に関係した子供向けの本、図鑑、ハロウィーンなど季節に関係する絵本なども新たに加えた。しかし一方で、絵本や児童書はひらがなが多く使われ漢字は簡単なものが最小限しか使われていない場合が多く、漢字があった方が読みやすいという一部の学習者からの声もあり、日本語学習者を対象にした多読用図書を充実させるためNPO多言語多読（2006）『レベル別日本語多読ライブラリー』のほかにNPO多言語多読監修（2016）『にほんご多読ブックス』も用意した。そして、多読学習活動を全てのセクションで授業の最初に行うことにしてしまうと、選べる本の数が少なくなってしまうことから、セクションで多読の時間を授業の最初の20分と最後の20分に分けて実施した。前学期同様、学習者同士での本に関する会話が教室内外で見られたし、教員と本について話すことも増えた。また、本を選んでいる時にどれが良かったか、どんな本が好きかなど学習者に質問し、次回の多読に用意する教材の参考にした。多読用図書、ウェブサイトからの教材、絵本などを含め、毎回80～100冊用意した。

新しい試みとして、読むというインプット活動だけでなく、読んだものについて書くというアウトプット活動も取り入れてみることにし、書店にあるPOP広告のようなものを作成させた。多読を4回終えた段階で、読書カードを見ながら、どの本がよかったかグループで発表し合う機会を設けた。そして、各自が読んだ本の中からよかったものを1冊選び、それがどんな本かを2、3文で簡単に説明したものを書かせた。教員が日本語の間違いなどをチェックした後、小さく切った色画用紙に清書させた。イラストを描いたり、カラフルなペンで書いたりした学習者もいた。そのPOP広告を教材である本に実際に添付し、学習者が本を選ぶ際の参考になるようにした。このPOP広告をじっくり読んで本を決める姿も多く見られた。学期末には、読書カードを活用し、それまでに読んだ中で一番好きだった本について、どんな本か、どうしてその本が一番好きか、どんな人に読んでほしいかを書き、それを本の紹介文とした。学期終了時には、読書カードと紹介文と各課の作文の清書を各学習者の作品集として1冊にファイルし、それを学習の成果として学習者に返

却した。

ここまで3学期間多読学習活動の実施に関わったが、様々なバックグラウンドを持ち、興味も異なる学習者に読む楽しみを味わってもらうためには教材のさらなる充実が必要であり、どのようなものがよいのかを探り続ける必要があると感じた。日本語学習者を対象とした多読用図書ではない本を手に取って読んだ学習者も多くいたということは、日本人と同じものを読んでみたいという学習者の欲求の現れのように思われる。幼児用絵本に関して、粟野ほか（2012）は「幼児用絵本のすべてが多読に不向きだということではなく、語彙の推測を補うような挿絵が入っていたり、同じような場面に同じような言葉が繰り返されているものなら、使えるものもあります。」と述べている（p. 31）。よって既存の絵本や児童書などの中から、学習者が「わかる」「面白い」と実感できるような魅力的な本を探し続ける価値はあるのではないだろうか。

4.4. 2020年春学期

2020年春学期は、説明、開始時期、教材の量や段階的なコントロールを前学期と同様にして多読学習活動を4回実施した。また、前学期に学習者が作成したPOP広告を教材である本に添付しておいたので、学習者は初回からそれを読んで本を選ぶことができた。

しかし、その後新型コロナウイルス感染症の広がりにより、学期途中で学習者が帰国し、授業がオンラインで実施されることになった。そのため、対面では楽しみながら読むことが主な目的であった多読学習活動がオンラインでは日本語学習を支える活動となり、その役割が大きく変化した。

オンラインでの多読はLMS（Canvas）を用いた非同期型授業で6回実施し、それは課題として点数が設定され、学習者が課題を提出すればその点数がもらえる形で、成績の一部として組み込まれることになった。多読のための教材の多くは、NPO多言語多読が開設しているウェブサイト「にほんごたどく」にある無料の読み物[4]であった。「旅行」「昔話」「怖い話」などテーマを決めて毎回5～10前後の教材をLMS上に用意した。学習者はその中から2点を選んで読み、「やさしさ」と「面白さ」を評価し、コメントを記入して提出した。また、前学期と同様にPOP広告を作成させたり、紹介文を書かせたりした。この学期の学習者は対面授業での多読の際にPOP広告を目にしていたので、オンラインでの課題になっても特に問題はなかった。対面授業での多読教材のPOP広告を書いた学習者もオンラインでの多読教材のPOP広告を書いた学習者もいた。学習者がテキスト形式で提出したPOP広告は、教員が正しい日本語に直し、POP広告を共有する課題を後日設定した。対面授業での多読教材を選んだ場合には、表紙の写真とPOP広告を載せ、学習者はそれらの中からどれが読んでみたいかを答えた。オンラインでの多読教材を選んだ場合にはタイトルとPOP広告を載せ、学習者はそれらの中からその回の多読教材を選び、

読んだ後評価とコメントを提出した。

新しい試みとしてそれまで多読では扱わなかったマンガや動画も使用した。マンガを取り上げた理由は、慣れないオンラインでの学習の息抜きとなるのではないかと考えたからである。「MATCHA―やさしい日本語」というウェブサイト[5]にある「まちがいやすい日本語」の4コマ漫画を利用した。漫画と同じような経験をしたという学習者からのコメントがいくつもあり、日本語学習初期を思い出すきっかけとなったようだ。動画として利用したのは、NHK for schoolの「おはなしのくに」[6]であった。それまでに色々な昔話を読んでいたこともあり、教材として『うらしまたろう』『ヘンゼルとグレーテル』『ももたろう』を選んだ。学習者は3つの中から1つ選択し、サイト内の「読んでみよう」にあるお話を読んだ後、読んだお話の動画を視聴した。学習者は視聴後、他の多読の課題同様に「やさしさ」と「面白さ」の評価とコメントを提出した。オンライン学習となり日本語を聞く機会が激減してしまったこと、オンラインでの多読学習活動も楽しんでほしいという思いから動画の視聴を多読学習活動の最後の課題として設定した。

突然のオンライン化ではあったが、対面での多読学習活動と似たような形で続けることができ、また動画の利用などオンラインだからこそできることがあるのではないかという可能性も感じた。対面であれ、オンラインであれ、「読む」こととそれ以外の活動をどのように結び付け、学習活動をより豊かなものにしていくかを今後の課題としたい。

5. 全面オンライン化に伴う問題と新たな試み（2020年秋学期）

3.3で述べたように、2020年秋学期日本語コースは学期を通してすべての授業がオンラインで行われ、Zoom授業が週5コマ、オンデマンド（非同期型）授業が週3コマとなった。Japanese IIではオンデマンド授業の一環として多読を取り入れることになったが、これに伴い、いくつか問題が浮上した。例えば、対面多読授業を受けた経験がない学習者に対して、体験的学習とも言える多読学習活動の目的と魅力をLMS（Canvas）の課題ページでどう伝えるのかという問題があった。ほかにも、前学期のオンデマンド多読全6回に対してこの学期は全12回となり、多読が自分のペースで取り組める活動であるとは言え、果たして学習者の意欲がそこまで持つのかという懸念もあった。学習者のストレス増加や意欲低下もあり得るだけに、オンデマンド多読学習活動をより豊かなものにすることが急務となった。そこで、この学期では、解決策の1つとして「教材をより魅力的に見せる」「朗読を聴くことができるようにする」等、オンデマンドであっても体全体で日本語に触れる体験ができるような仕組みをつくることに力を注いだ。また、日本語を体感できる新たな読後活動「朗読」も行った。本章では、この学期の工夫と新たな試みを中心に報告する。

5.1. 2020年秋学期の多読学習活動の概要

2020年秋学期の多読学習の概要は表2の通りである。14週間のコースの中で、全8回（多読①～多読⑧）＋4回（説明、POPを書く、紹介作文、朗読発表）行った（表2）。コース開始2週目に「多読の説明」を読む課題を設け、3週目から多読課題を開始させた。課題提出の流れは、前学期同様、Canvasの課題ページの中から学習者が好きな教材（本や動画）を選び、読書後に一言コメント等を書いた読書記録を提出する形である。評価は、前学期と同様に、読書記録の提出をもって課題点を与え、記録の文法・語彙間違いは問わないこととした。

表2　2020年秋学期　多読課題カリキュラム概要

週	課題	読み物・動画（数）	内容／（作品名）
2	前作業		多読についての説明文を読む
3	多読①： やさしい本から	レベル0–1の多読本(5)	文化・生活に関するもの (多読本『あれは何？』『これは何でしょう』など)
4	多読②： やさしい本から	レベル1–2の多読本(6)	文化・生活に関するもの、昔話のリライト (多読本『お菊さん』など)
5	多読③： ことばを楽しむ	レベル1の多読本（2） 動画（2）	言語に関するもの (五味太郎ANIMATION WORLD『さる・るるる』[7] など)
6	多読④： まんがを楽しむ	Webサイト記事（5）	漫画（解説付）(MATCHAやさしい日本語[5]「はい・いいえ」など)
7	中間課題： POPを書く		多読①～④の中からおすすめの本を選んでPOP広告を書く
8	多読⑤： 共有する		クラスメイトのPOP広告を読んで、読みたいもの観たいものを読む・観る
9	多読⑥： 外国のお話	レベル2の多読本（5）	国際的な話題、世界の昔話 (多読本『シュモーハウス』など)
10	多読⑦： 日本のお話	レベル1–2の多読本(2) 動画（1） サイト記事（2）	日本の昔話、日本の文化に関するもの (NHK for school『うらしまたろう』[6] など)
11	多読⑧： 詩を楽しむ	リライトされていない 新規読み物（6）	詩や歌（解説付） (金子みすず「こだまでしょうか」[8] など)
13	まとめの作業： 紹介作文と朗読		多読①～⑧の中から好きだった本の紹介文を書く 朗読発表（音声ファイルの提出）

2020年秋学期において具体的にどのような工夫をしたのか、1）説明　2）教材　3）教材の段階的コントロール　4）読書記録　5）読んだ後の活動に関して、以下に記しておく。

1）説明

説明では、前学期に続き「好きなものを読む（面白い本を読む）」「やさしい本を読む」「わからないことば（難しい単語）は飛ばす」「わからない時は違う本を読む」の4点を伝えたが、「絵や音声も観る・聴く」「好きな言葉やフレーズを声に出す」も加え、自分の目や耳や心を総動員して体全体で日本語の世界に入るよう促した。また、楽しみながら読むことで日本語力が向上する旨もCanvasに記した。

2）教材

教材は、前学期を参考にしてNPO多言語多読が開設しているウェブサイト「にほんごたどく」で紹介されている無料の読み物（以下、「多読本」）を利用したり、ウェブサイト「MATCHA―やさしい日本語」の中の漫画や記事、一般公開されている動画[9]を利用したりしたが、オンライン上での読書体験をさらに豊かにするために、この学期では①～③の工夫をした。

①表紙絵の掲載　対面多読で得られた「美しい装丁の本を眺める楽しさ」を再現するためにCanvas上に多読本の表紙絵を掲載した[10]。掲載した結果、Canvas上が色彩豊かに変化した。ただし、情報過多によるストレスを軽減するため、一回に掲載する読み物および動画は前学期より少ない4～6点に絞った。

②朗読音声の掲載・作成　付属音声を利用すると同時に、音声のない多読本を中心に朗読音声を作成した。作成にあたり「劇団名芸」[11]関係者有志の協力を得た。劇団員は声だけで「物語の背景を描きだす」「起承転結をつける」など、短い文章にも深みを与えることができる[12]。協力者のアイディアで音楽を挿入したものもあり、ラジオドラマのような教材もできた。

③新規読み物の追加　リライトされていない文章に触れる機会を増やす目的で新規読み物を追加した（多読⑧）。様々なジャンルの中から、今回は詩や歌を選び、教師が解説を付けてPDFにした。対面多読であれば触れられるはずの詩的絵本の代替になればと考えた。また、想像することや韻律を楽しむことによって学習者の心身が解放されることを期待した。

3）教材の段階的コントロール

これまでと同様に教材の段階的コントロールを行った。ただし、ストレスが過剰になった場合に備えて、学習者の意思で学習量をコントロールできるように後半期においては「文

法や語彙の難しいもの」「量の多いもの」を紹介すると同時に平易なものも必ず入れた。

4）読書記録

この学期では、毎週Canvasの課題のページの中から、学習者が面白そうだと思う教材2点（学期後半は1点）を選んで、読書後に各自でCanvasに読書記録を提出することとし、読書カード（word）に記入する形をとった。この記録には①1～3文のコメントと、新たに②「好きな部分（フレーズや言葉）」を書き込む箇所を設けた。これは学習者の肯定的な気持ちや主体的参加を促すためだった。また、教師やクラスメイトと共有する際にも役立つかもしれないと考えた。これまで設けていた「やさしさ」「面白さ」の評価については、課題が過多になるかもしれないと考え、この学期では割愛した。

5）読んだ後の活動

読後活動には、これまでの活動を引き継いで「（お気に入りの本・動画の）POP広告の作成」「（好きだった）本・動画の紹介作文」を行い、「朗読発表」も行った。ただし、この学期の学習者には、実際にPOP広告を見せることができなかったので、先学期同様Canvas上に見本の写真を掲載して説明したが、この活動の楽しさや面白さを十分に伝えられなかった。「朗読発表」はこの学期に新しく試みた読後活動であるが、学習者は意欲的に取り組んだ様子であった。詳細は5.3に報告する。

5.2. 学習者の様子

Zoomで対面した折に多読本を気に入ったかどうかと尋ねたところ、ある学習者は笑顔で本の感想を話してくれた。お気に入りを朗読し始める学習者、多読の宿題をもっとしたいと画面越しに訴える学習者もいた。全員から感想を聞くことはできなかったが、聞いた範囲では、全面オンラインのオンデマンド多読においてもある程度好評を得たようである。その一方で、読書記録の方法には課題も残った。例えば、ある学習者は毎週指示通りに教材2点（学期後半は1点）の読書記録を提出していたが、毎回コメントが短かったために熱心さを測りかねていた。しかし、学期後半になって、実は全ての教材に目を通すほど夢中になって読んでいたことがZoomでの会話を通して判った。このような学生を把握するためにも、読書記録の方法を工夫する必要があると感じた。

5.3. 多読の学習成果発表としての朗読

5.3.1. 発音練習とのタイアップ

2020年秋学期Japanese IIのクラスでは、多読と並行して音読練習（以下、発音練習）を行った。日本語教育における音読の効果は語彙・文法・発音に関するものだけでなく、「作

品について深く考え、味わう」など読みの深まりに関する効果も指摘されている（福富・土居2020）。そこで、この学期では新しい試みとして、発音練習と多読を並行して行い、最後に双方の学習成果として「朗読発表」を行うことを計画した。学習者は自身が読んだ多読の作品の中で最も好きだったものを1つ選び、自分なりに声にする。朗読発表を行う目的・狙いは作品をより深く理解し表現すること、また、多読は個人的な活動であるが、朗読発表により他の学習者と作品を共有することであった。

5.3.2.　発音練習の内容

発音練習は朗読の基礎となる日本語の発音の土台作りとして位置づけ、「日本語の発音のベース（基礎）を作ること」、「日本語らしいフレージングができるようになること」の2つを主な目的として練習を行った。練習はシンプルで、既に授業で学んだ教科書『げんきII』の読み物の抜粋をテキストとし[13)]、モデルの音声をよく聞き、日本語のリズムを理解し、フレージングを意識して練習させた。教師は毎回フィードバックを行い、また学期中に一度個別の発音指導を行った[14)]。

1）発音練習スケジュール

2020年秋学期Japanese IIの発音練習の概要は表3の通りである。概ね2週間に1回の頻度で行った。

表3　2020年秋学期　発音練習の概要

週	活動	発音教材
3	発音練習①	『げんきII』13課「日本のおもしろい経験」
5	発音練習②	『げんきII』15課「私が好きな所　京都（嵐山・嵯峨野）」
7	発音練習③	『げんきII』16課「まんが『ドラえもん』」
9	発音練習④	『げんきII』19課「手紙とメール」
	教師の個別指導	Webサイト記事
11	発音練習⑤	『げんきII』21課「厄年」
	朗読の説明	
13	朗読発表	多読教材の中から各自が選んだもの。

2）発音練習の流れ

学習者は毎回の発音練習を次のような流れで行った。

①イントネーションが示されたテキストを見ながら、モデルの音声をよく聞く。

②フレージング、発音、速さに気をつけながらテキストを声に出して読む。

③声を録音して録音ファイルを提出する。

④教師からのフィードバックを見て自分の発音を振り返り、新しい発音練習を行う。

オンラインを使用した発音指導の利点がいくつか挙げられる。まず、対面での発音指導に比べて学習者は音に集中でき、また、Zoomを利用し短い時間で効率よく指導ができる点である。

5.3.3. 朗読発表

学習者は各自が学期を通して多読で読んだ作品の中から一つを選び、作品の紹介文を書き、朗読を行った。朗読は選んだ作品の好きな部分（5～6文）を朗読し[15]、録音した音声ファイルを提出した。発表はCanvasに「私が一番好きだった本＆ろうどくの発表」というページを作成し、それぞれの朗読音声ファイルと作品紹介文を掲載し、全体で共有した。共有することで学習者が自由に他の学習者の作文を読んだり、朗読を聞いたりできる。また、そこで興味を持った本を読んでみることも促した。

多読で扱った作品のジャンルは「物語」「詩」「説明文」の3種類であるが、朗読発表で7名の学習者が選んだ作品のジャンルは、「物語」3名、「詩」2名、「説明文」2名であった。また、「物語」「詩」を選んだ学習者のうち、それぞれ2名ずつが同じ作品を選んだ。全体数が少ないので明確には言えないが、学習者が好むジャンルは様々で、各ジャンルの中でも人気のある、朗読したくなる作品があることがわかる。

学習者の朗読はどれも学習者の心が伝わってくるような温かみのある朗読であった。精細な表現で自身の気持ちを作品に託し、語りかけるように朗読する学習者もいた。また、朗読は作品の好きな部分5～6文で良いことにしたが、一つの物語作品を全て朗読した学習者もいた。それぞれが自分なりに意欲的に楽しみながら朗読していることが窺えた。発音面においても、学習者は自然な日本語のまとまり、フレージングを意識して表現し、継続的に発音練習を行った成果が表れている様子であった。

6. オンラインでの多読活動の継続（2021年春学期）

2020年秋学期に続き、2021年春学期もZoomとLMS（Canvas）によるオンライン授業が実施されることになった。本章執筆者（渡会）は、2021年春学期のJapanese IIを担当し、前学期から引き継ぐ形で多読活動を計画、実施した。多読活動は、前学期同様、LMS（Canvas）を使用したオンデマンドによる課題とした。本章では、この学期におけるオンデマンド型多読活動の取り組みを報告したい。

6.1. 2021年春学期の多読活動の概要

2021年春学期の多読活動は、14週間のコースの中で、全9回（多読①～多読⑨）＋2回

（プロジェクト）行った（表4）。前学期と同様に、コース開始2週目に、まず「多読の説明」を読む課題を設け、その後コース開始3週目から、学習者が好きな時間に課題に取り組むことができるオンデマンド形式で多読課題を開始させた。活動の流れも前学期同様、Canvasの課題ページにオンラインで読める多読本をいくつか掲載し、その中から学習者が好きな本を1点選び、読書後に一言コメント等を書いた読書記録を提出する、という形をとった。評価は、前学期と同様に、読書記録の提出をもって課題点を与え、記録の文法・語彙間違いは問わないこととした。また、12週と13週には前学期と同様に朗読活動との合同プロジェクトを実施した。この合同プロジェクトの詳細については6.4. で後述する。

表4　2021年春学期　多読課題カリキュラム概要

週	課題	読み物・動画（数）	内容／（作品名）
2	前作業		多読についての説明文を読む
3	多読①： やさしい本から	レベル0–1の多読本(5)	文化・生活に関するもの （多読本『あれは何？』『これは何でしょう』など）
4	多読②： やさしい本から	レベル1–2の多読本(6)	文化・生活に関するもの、昔話のリライト （多読本『お菊さん』など）
5	多読③： ことばを楽しむ	レベル0–1の多読本(5)	言語に関するもの （多読本『TKG』など）
6	多読④： まんがを楽しむ	サイト記事（5）	漫画（解説付）（ウェブサイトMATCHAやさしい日本語[5]『はい・いいえ』など）
7	多読⑤： 短い動画	動画（3）	一般図書のビデオ版へのリンク （五味太郎ANIMATION WORLD[7]『さる・るるる』など）
8	多読⑥： 長い動画	動画（5）	NHK for Schoolへのリンク （JAPANGLE『マンガ』『すし』など）
9	多読⑦： 外国のお話	レベル1–2の多読本(5)	国際的な話題、世界の昔話 （多読本『シュモーハウス』など）
10	多読⑧： 日本のお話	レベル1–2の多読本(2) サイト記事（2）	日本の昔話、日本の文化に関するもの （『三まいのおふだ』など）
11	多読⑨： 詩を楽しむ	動画（4）	詩の動画へのリンク （金子みすゞ『星とたんぽぽ』など）
12	まとめの作業		紹介文を書く
13	発表		朗読課題との合同プロジェクト発表

6.2.　多聴・多観の取り組み

多読課題の多くは、前学期と同様に「にほんごたどく」や「KCよむよむ」、「読み物いっぱい」の無料の多読本[16]から選んだ（多読①～③、⑦、⑧）が、この学期では多読だけでなく、対面授業ではなくオンラインだからこそ取り組みやすい活動として、動画を使った多聴・多観活動[17]も実施することにした。動画はこれまでの活動においても適宜

取り入れてきたが、この学期ではカリキュラム中盤、学習者がおおむね多読に慣れてきた頃から、短い動画から長い動画、また難易度の高い動画へと、段階的に視聴を取り入れることにした（表4；多読⑤、多読⑥、多読⑨）。まずは、多読⑤では前学期の課題と同じ5分程度の絵本の朗読動画[18]（文字付き）、次に多読⑥で少し長め（20分程度）の文化紹介動画[19]、そして多読⑨では詩の朗読動画[20]を課題として与えた。

多読⑥は、多読⑤の朗読動画とは異なり、動画の画面上には文字情報がないため、学習者にとっては難易度が高かった。しかし、「マンガ」や「すし」など日本文化に興味のある学習者にとって好奇心を満たす内容が多いため、発話が理解できなくても、内容が面白いので課題以外の動画も視聴した、という学習者からの声が多く聞かれた。また、文字情報についても、動画が掲載されているウェブページ上には、動画の画面横に発話内容の文字起こしが掲載されているため、発話内容を文字で確認したい学習者にとってはその点も好評だった。

多読⑨では、詩の朗読動画（文字付き）を視聴させた。詩の課題は前学期でも実施したが、この学期では言葉や文法を解説する補助資料は一切与えなかった。これは、理解できる範囲の単語や表現から内容を推測しつつ、詩のリズムや音を楽しんでもらうことを目的としたためだ。詩の多くは難解な内容だったにも関わらず、詩の課題を楽しめたという学習者が多く見られた。

多読⑥、多読⑨は、いずれもJapanese IIの学習者にとっては日本語能力的には難しい内容ではあったが、学習者からの評判は非常によかった。今回の取り組みを通して、多読のみならず、多聴・多観活動には、初中級であっても学習者の知的好奇心を満たすことのできる活動としての可能性を大いに感じた。学習者が日常的にPCにアクセスする環境にあるオンライン授業だからこそ、多聴・多観は学習者にとって取り組みやすいという利点もある。今後、対面授業の形態に戻ってからも、例えば教室内では本を使った多読活動を、そして教室外ではオンラインでの多聴・多観活動を行うといった両者の長所を生かしたハイブリッド型の多読活動を実施するなど、カリキュラムの改良を重ねていきたい。

6.3. 読書記録：ディスカッションボードの活用

もう一つ、2021年春学期多読活動での新たな取り組みとして、読書記録の提出方法の変更がある。前学期は読書記録をワードファイルにタイプさせて提出させたが、この学期では、Canvasのディスカッションボードに投稿する形を採用した。理由は、1）多読活動をオンラインで行う利点を生かし、活動の最初から最後まで（本を選び読む～読書記録の提出まで）をすべてCanvas上で完結できるようにすることにより、学習者の手間と心理的負担の軽減を考慮した、2）ディスカッションボード上にログが残るため、自分の読書記録をいつでも見直すことができる手軽さと、積み重ねた記録が残ることによる達成感の

得やすさを狙った、の2点である。

図1は、今回実際に使用したCanvasでの読書記録である。学習者は、本（動画）を読んだ後、Canvasのディスカッションボードに設定された課題別のボードにアクセスし、1.—5.の項目[21]について回答し、投稿をすることで課題完了となる。読書記録を書くのが目的なのではなく、多読活動そのものを学習者に楽しんでもらうため、記録は5項目と少なくし、それぞれシンプルで回答に時間をかけずにすむものを選んだ。項目としては、読んだ本の名前を記入するほか、おもしろさと難易度については「☆」の数で回答をさせ、あとは前学期と同様に簡単な感想コメントと、好きな言葉やフレーズを答えさせた。また、学習者が多読後の読書記録の提出を負担に感じないよう、コメントは日本語限定ではなく、英語でも記入してもよいこととした。

図1　Canvas（LMS）のディスカッションボードを活用した読書記録

以下に、実際にディスカッションボードを活用してみて感じた利点を挙げたい。

まず、ディスカッションボードの機能上、学習者はお互いの投稿を見ることができるため、学習者にとっては自分の投稿の参考になっていたように感じた。対面授業とは違って、オンライン授業では、学習者同士の直接顔を見合わせてのやり取りが簡単ではないため、自身の課題の取り組み方に不安があったとしても、他の学習者と比較したり他者を参考にしたりする機会を得るのが難しいが、ディスカッションボードの活用が、その点を容易にし

ていたように思う。また、他の学習者のコメントを読むことによって、自分が選んだ本以外のものへの興味を喚起する効果もあった。

さらに、ディスカッションボードのリプライ（返信）機能を利用して、他の学習者の投稿に自分のコメントをつける学習者も多かった。お互いの投稿に自由にやり取りをすることで、課題として提示していない本や情報をお互いに交換しあう様子も見られ、学習者間の交流の場にもなっていた。

最後に、感想コメントは日本語だけでなく英語でも記入してよいことにしたため、日本語では上手く表現できない気持ちも英語で思う存分書けることから、日本語でのコメントと比べ、より長く深い内容のコメントを英語で書き込む学習者が多く見られた。また、教師側は、日本語でのコメントの文法的な間違いに対して訂正や指摘をあえて行わなかったため、学習者はリラックスして自分の気持ちを表現できていたようにも感じた。

このように、ディスカッションボードを活用した読書記録には多くの利点があり、オンライン多読活動ならではの有意義な課題であったと言える。こうしたオンライン多読活動の利点を、通常の教室内での多読活動に上手く取り入れていく工夫が今後の課題として挙げられよう。

6.4. 音声表現

6.4.1. 発音練習

2020年秋学期のJapanese IIのクラスでの実践により、多読と並行して発音練習を行い、双方の成果として朗読発表を行うことに意義があることがわかった。朗読発表の前から少しずつ発音練習を行うことで、学習者の発音・音声表現についての意識も持続され、声に出して読むことへの「構え」が自然と身につくと思われる。これらを踏まえ、2021年春学期Japanese IIのクラスにおいても、多読と並行して音読の発音練習を行った。使用教材、練習回数、教師によるフィードバックや評価等、発音練習の方法は前学期と同様に行った。

6.4.2. 朗読発表

2021年春学期Japanese IIのクラスでの「朗読発表」は、学習者が学期を通して読んだ多読の作品の中で最も好きだったものを1つ選び、作品の紹介文を書き、自分なりに声にして朗読した。これは前学期に新しく取り入れた試みであり、作品をより深く理解し表現すること、また、他の学習者と作品を共有することを目的としている。

本学期の大きな特徴は朗読発表をZoomで行ったことである。前学期の朗読発表はCanvas上に多読紹介作文と朗読音声ファイルを掲載した。これは学習者にとって心理的な負担が少ないことや学習者がいつでも自由に他の学習者の発表を閲覧できる良さがある。一方で、学習者が非常にいい朗読をしていたにもかかわらず、他の学習者とその場で共に体験し、共有することはできなかった。そこで本学期はZoomで朗読発表を行うこと

で、学習者同士の発表の共有体験の機会を設けた。

朗読発表の際にはZoom共有画面で作品のイメージを表す写真や絵などを共有させた。この状態で朗読を発表することで、単調になりがちな朗読発表がオンライン上でも彩られ、他の学習者にとっても作品理解の助けとなった。

多読で扱った作品のジャンルは前学期と同様に「物語」「詩」「説明文」の3種類であるが、本学期の学習者10名のうち、朗読発表で学習者が選んだ作品のジャンルは「物語」3名、「詩」3名、「説明文」4名であった。学習者のジャンルの好みは様々であり、先学期同様に多読・朗読においてはいくつかのジャンルの中から学習者が選択できる形が良いことが示唆される。前学期と異なる点は、本学期は同じ作品を選んだ学習者がいなかったことである。また前学期・本学期の学習者の様子から、朗読では「物語」「詩」など文学的な作品だけでなく、「説明文」のような読み物も同じように好まれることも示された。

表5　学習者が選んだ朗読作品

ジャンル	2020年秋学期	2021年春学期
物語 多読本Level1–2「お菊さん」など	3	3
詩 「星とたんぽぽ」（金子みすゞ）など	2	3
説明文 多読本Level1–2「シュモーハウス」「日本のパン屋さん」「お化け」など	2	4

（数字は選んだ学習者の数を表す）

朗読発表において学習者は生き生きと朗読を行っていた。普段の授業の中で日本語を話す時とは趣が異なり、学習者の作品への理解やイメージがとてもよく表現された朗読であった。また、発表後に他の学習者から発表者へ感想・コメントを言ってもらった。発表者の朗読について発音やリズムなどの良かった点や頑張ったことへの称賛などがあり、互いに発表を共有したことで、他の学習者との交流も直接的に積極的に行われた。朗読は正に自分の耳、声、心を通して、「体全体で」体験する学びと言えよう。

7. おわりに

以上、2018年秋学期から2021年春学期のJapanese IIでの多読について報告した。

それぞれの学期において、授業担当者は、それまでの実践を振り返り、参考にし、また各学期の状況に対応しつつ、学期を通しての多読カリキュラムを作成、教材を準備し、読書記録や朗読等の活動を工夫し、授業を行った。多読は、基本的に辞書を使わず楽しんで

読むものであり、母語での読書に近い読み方であるが、このように行われたJapanese IIにおける多読は、学びと生活を豊かにする読書体験としての側面があると言えよう。

（注）

1） 2021年春学期以降は第3版である坂野ほか（2020）を使用している。
2） 詳しくはMachida & Crocker（2021）が報告している。
3） KCよむよむ＜https://kansai.jpf.go.jp/clip/yomyom/＞
4） NPO多言語多読「にほんごたどく特設サイト」＜https://tadoku.org/japanese/free-books/＞
5） MATCHA―やさしい日本語―まんが特集＜https://matcha-jp.com/easy/manga＞
6） NHK for School　おはなしのくに＜https://www.nhk.or.jp/school/kokugo/ohanashi/＞
7） ウェブサイト五味太郎　ANIMATION WORLD〈公式〉
＜https://www.youtube.com/channel/UCC7HXVrL6QfsG_ptTySmgsA＞
8） 金子みすゞ（2003）を参照した。
9） 学校向けの教育動画だけでなく、絵本作家やアーティストの作品が一般公開されているウェブサイトにリンクを貼り、リライトされていない読み物に触れる機会を作ると同時に視覚的な楽しさを提供した。
10）表紙絵の掲載にあたり、NPO多言語多読「にほんごたどく」から了承を得て掲載時には引用元・作者・URLを明記した。
11）劇団名芸は名古屋市天白区にある1962年創立のコミュニティーシアターである。来日していれば耳にすることができたはずの多様な背景を持つ人の声、小学生から70代までの男女10名という幅広い年齢層の個性の違う声の協力を得た。
12）朗読者の了解を得てノイズを切るなどの加工・編集を施した。多読本を朗読したことに関してはNPO多言語多読「にほんごたどく」から了承を得た。
13）発音練習で使用したテキストは既に授業で学んだ教科書『げんきII（読み書き編）』の読み物の抜粋である
14）フィードバックは「フレージング」「発音」「読みの正確さ」「流暢さ」の4つの項目で点数評価とポイントとなる具体的なコメントを行った。個別の発音指導は一人15分程度zoomで行い、学習者の弱い所を個別に指導した。
15）読みたい人は一つの作品全部を読んでもいいこととした。
16）NPO多言語多読「にほんごたどく特設サイト」＜https://tadoku.org/japanese/free-books/＞
KCよむよむ＜https://kansai.jpf.go.jp/clip/yomyom/＞
読み物いっぱい
＜http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/project/Yomimono/Yomimono-ippai/index.html＞
17）下記の「NPO多言語多読ブログ」内には「多読・多聴・多観Webリソースの紹介」として、多読だけでなく、多聴・多観のためのリソースが多く掲載されている。
＜https://tadoku.org/blog/blog/2020/08/21/9642＞
18）YouTubeから視聴
19）NHK for School＜https://www.nhk.or.jp/school/sougou/japangle/＞
2021年8月現在、リンク切れ
20）＜http://www.applewave.co.jp/kizuna/msg.html＞
2021年8月現在、リンク切れ
21）これらの項目は、下記で紹介されている読書記録（米国ノートルダム大学）も参考に作成し

た。
「日本語教育いどばた」のぞいてみよう！多読の世界
第5回多読授業、こんな時どうする？ Q＆A10選＜https://www.idobata.online/?p=2245＞

（執筆分担）

1. 駒田　2. 駒田　3. 竹田・土居　4. 大西　5.1 ～ 5.2 中村　5.3 福富　6.1 ～ 6.3 渡会
6.4 福富　7. 駒田

参考文献

粟野真紀子・川本かず子・松田緑（編著）、NPO法人日本語多読研究会（監修）（2012）『日本語教師のための多読授業入門』アスク出版
池田庸子（2018）「多読から創作へ　―中級日本語学習者を対象とした多読授業における試み―」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 25 No. 1, pp. 8–9
大越貴子・浅井尚子・中村かおり（2020）「アウトプットにつなげる多読授業　―多読専用教室での試みから―」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 26 No. 2, pp. 126–127
片山智子（2015）「日本語で『多読』を楽しむ　―自分の『読み』を表現する授業―」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 22 No. 1，pp. 52–53
門田修平・野呂忠司（2001）『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版
熊田道子・鈴木美加（2013）「日本語中級前半レベルにおけるExtensive Readingの効果」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』39，pp. 31–48
熊田道子・鈴木美加（2019）「第9章　多読の教室活動：心理学の三つの理論をベースにした多読実践」石黒圭編『日本語教師のための実践・読解指導』くろしお出版
作田奈苗（2021）「日本文化の知識を増やすことを目的とする日本語多読　―上級学習者の多読授業から―」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 27 No. 1, pp. 18–19
佐々木良造（2017）「授業内多読活動に関する自己評価の分析」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 23 No. 2, pp. 40–41
佐々木良造（2019）「大学図書館内の一室を利用した多読の実践報告」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 25 No. 2, pp. 114–115
デイ，リチャード・バンフォード，ジュリアン（2006）『多読で学ぶ英語：楽しいリーディングへの招待』桝井幹生監訳、川畑彰ほか訳　松柏社．［原著：Day, R. & Bamford, J. (1998). Extensive Reading in the Second Language Classroom. Cambridge: Cambridge University Press.］
福富七重・土居美有紀（2020）「日本語初級クラスにおける音読劇の試み」『南山大学外国人留学生別科紀要』第3号，pp. 53–65
横山理恵子（2018）「中級アカデミッククラスにおける多読活動の試み　―看図作文を用いた産出量の変化―」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 25 No. 1, pp. 12–13
横山りえこ（2021）「オンライン日本語多読授業の試み」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 27 No. 1, pp. 66–67
Hanabusa, N. & Juhn, H. (2018). Japanese Extensive Reading Courses at a U.S. University: Meaning-focused Input and Output Facilitated by a Japanese Instructor-Librarian Team. *Extensive Reading World Congress Proceedings*, 4, pp. 209–218
Machida, N. & Croker, R. (2021). Study abroad online: Possible, and worth doing, even in a pandemic. 『南山大学外国人留学生別科紀要』第4号，pp. 51–65

教材（主教材）

坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2011）『初級日本語げんきⅡ第2版』The Japan Times
坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2020）『初級日本語げんきⅡ第3版』The Japan Times
三浦昭・マグロイン花岡直美（2008）『中級の日本語　改訂版』The Japan Times

教材（多読教材）

NPO多言語多読（2006）『レベル別日本語多読ライブラリー　にほんごよむよむ文庫』アスク
NPO多言語多読監修（2016）『にほんご多読ブックス』大修館書店
金子みすゞ（2003）『金子みすゞ童謡集　わたしと小鳥とすずと』JULA出版局

A Practical Report on Extensive Reading in a Pre-advanced Japanese Course
—From the 2018 Fall Semester to the 2021 Spring Semester—

Ryoko ONISHI, Toko NAKAMURA, Shoko WATARAI,
Nanae FUKUTOMI, Kazuyo TAKEDA,
Miyuki DOI, Tomoko KOMADA

Abstract

This study analyzed the extensive reading activities conducted in a pre-advanced Japanese course from the fall semester of 2018 to the spring semester of 2021. Extensive reading is a learning activity that involves learners reading texts that s/he chooses, for enjoyment. In our practice, extensive reading activities were held eight times in a semester on average. In each session, learners maintained a reading log of each book they read. For the activity, books were initially used as reading material, following which picture books and children's books were employed. After two semesters of practice, we decided to increase the difficulty level of the reading material in each session and conduct activities wherein learners were instructed to write essays to introduce the reading material to their classmates. In 2020 and 2021, the pre-advanced Japanese course was held online. Therefore, extensive reading activities were held in an on-demand format using the learning management system (LMS), Canvas. Poems, videos and graded readers for extensive reading, which were freely available on the internet, were used as reading material. In addition, the LMS discussion board was used as a reading log to enable learners to discuss the books they read. Learners were also instructed to read aloud part of the reading material at the end of the semester.

Keywords：pre-advanced Japanese course, extensive reading, reading log, reading aloud, online course